



大隅 典子 先生

略歴

1984年東京医科歯科大学歯学部卒，歯学博士。同大学歯学部助手，国立精神・神経センター神経研究所室長を経て，1998年より東北大学大学院医学系研究科教授。2006年より東北大学総長特別補佐，2008年に東北大学ディスティングイッシュトプロフェッサーの称号授与。2015年より医学系研究科附属創生応用医学研究センター長を拝命。2018年より副学長。第20～22期日本学術会議第二部会員，第23期，第24期同連携会員。専門分野は発生生物学，分子神経科学，神経発生学。2004～2008年度，CREST「ニューロン新生の分子基盤と精神機能への影響の解明」研究代表を，2007～2011年度，東北大学脳科学グローバルCOE拠点リーダーを，2016年～新学術領域「個性」創発脳領域代表を務める。著書に『脳から見た自閉症「障害」と「個性」のあいだ』（ブルーバックス），『脳の誕生—発生・発達・進化の謎を解く』（ちくま新書），訳書に『心を生み出す遺伝子』（岩波現代文庫）など。

デジタル時代の研究倫理と論文指導

東北大学大学院医学系研究科
大隅 典子

歯科医師や歯科衛生士には職能集団としての行動規範を規定する法律がありますが，真理の探求や新しい技術の開発を研究者には，そのような法律はありません。したがって，自律的な研究倫理が求められているといえます。研究不正の話は，けっして明るく楽しい話題ではありません。「これは由々しき事態だ！」と激昂する方もいれば，「こんな事例は滅多に無いことだから，まっとうな研究者は己の研究に邁進すべき」と考える方もおられます。私は，メディアに載るくらいの研究不正の背景には，近い人たちには知れ渡っているレベルの不正があり，さらに研究不正の一手手前のエピソードがあると思った方が良いでしょう。つまり，ハインリッヒが提唱したいわゆる「労働災害の経験則」は，研究不正にもあてはまるのです。研究者を取り巻く環境は昨今，厳しさを増しています。研究開発競争の激化，研究資金・ポジション数の相対的減少，任期制がもたらす短期的な成果主義，といった問題が表面化していることは明らかです。このような厳しい環境は，ともすると研究者の倫理観をゆがめてしまう可能性があります。また，これまで，研究の公正さについての教育は，学部から大学院の課程において系統だっておらず，研究手法を学ぶことと抱き合わせで所属する研究室に委ねられてきました。さらに，教養部の廃止と大学院重点化に伴って教員あたりの大学院生数が増えたことや，大学を取り巻く競争的環境により教員自身が手取り足取りの指導をする時間が絶対的に不足しつつあることも，研究不正が生じてしまう背景になっていることが考えられます。加えて，教員自身もデジタル時代に対応した研究倫理教育を行うスキルにかけていると思われます。本講演では，研究の公正さを保つために研究者はどのように自らの研究に対峙していったらよいのか，研究論文の発表を行う上で何について気をつければよいか，本講演者の経験を元にポイントをお伝えしたいと思います。

参考：

「研究活動における不正行為への対応等に対するガイドライン」の決定（文科省）：

http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/26/08/1351568.htm

CITI Japan プロジェクト：

<http://www.jusmec.org/citijapan.asp?language=japanese>

「科学の健全な発展のために—誠実な科学者の心得—」（テキスト版，学術振興会）：

<http://www.jsps.go.jp/j-kousei/data/rinri.pdf>

「責任ある研究のための発表倫理を考える（高等教育ライブラリ）」（東北大学高度教養教育学生支援機構編，東北大学出版会）